

女性映画プロデューサー吉崎道代氏特別講義開催報告

Report on Special Lecture by Female Film Producer Michiyo Yoshizaki

因藤 靖久 INDO Yasuhisa

デジタルハリウッド大学 メディアサイエンス研究所 研究員
Digital Hollywood University, Media Science Laboratory, Researcher

自伝本『嵐を呼ぶ女 アカデミー賞を獲った日本人女性映画プロデューサー、愛と闘いの記録』^[1]の発売に合わせてロンドンから世界的な映画プロデューサー吉崎道代氏が帰国することになった。本人のリクエストで次世代の映画人を目指したい若者へ向けての特別講義をおこないたいという。次世代の映画人育成という考え方に共感してデジタルハリウッド大学に相談をして今回の特別講義が実現した。特別講義のタイトルは、『嵐を呼ぶ女 アカデミー賞を獲った日本人女性映画プロデューサー、愛と闘いの記録』出版記念!! 世界を駆ける女性映画プロデューサーはどのようにして生まれたか?』とした。進行をおこなった私として、本講義を通してこれから未来にチャレンジしていく若人に伝えたいポイントを整理して紀要にまとめた。

1. 吉崎道代氏特別講義に際して

2022年7月7日(木)19:30からデジタルハリウッド大学駿河台ホールにて吉崎道代氏^(注1)の帰国特別講義を開催した。今回の帰国は吉崎氏が自伝本『嵐を呼ぶ女 アカデミー賞を獲った日本人女性映画プロデューサー、愛と闘いの記録』の出版に合わせて、プロモーションとパーティーに参加するためであった。吉崎氏はイギリス、ロンドンに居住しており、今年80歳となる今も新作映画のプロデュースを数多く手掛けている現役の映画プロデューサーである。帰国に際して本人からのリクエストとして基調講演をおこないたいという要望を受けての開催となった。講義の主旨としてはこれから映画業界を目指す学生や映画を製作したいと考えているクリエイター志望の学生など、映画の未来を切り開こうとしている若者たちへの指針となればという考えからである。

デジタルハリウッド大学内からの受講者を増やすために、図書館のVTuber図書紹介のコーナーで自伝本を紹介してもらい学生への興味喚起をおこなった。また、映画業界を志す学生を多数擁する日本大学芸術学部映画学科の学生に呼びかけた。そして、実際に映画業界で業務に従事している松竹ナビの若手のスタッフにも声をかけた。

本講義の進行を円滑におこなうには、映画業界のことを理解した上で噛み砕いてわかりやすく言語化出来る人でないと吉崎氏の話が伝えられないと判断して、私自身がおこなうことにした。加えて吉崎氏が過去に所属していた日本ヘラルド映画で宣伝をしていた坂上直行氏と一緒に登壇してもらい、吉崎氏の講義をフォローしてもらって盤石な体制を整えた。



図1:講義をする吉崎氏 撮影:鈴木佑(デジタルハリウッド大学)

2. 講義内容に関してのポイント

2.1 マーロン・ブランドに憧れて世界の映画界を目指す

今回の講義では理解しやすくするために、時系列に沿って吉崎氏のプロフィールを紹介しながら、今までの経歴の中で重要と思われるポイントごとに話をする進行とした。

世界に目を向ける切っ掛けは、大分での女学生時代にマーロン・ブランドが吉崎氏の神様となって、世界のどこか片隅で構わないので、世界の映画界で働きたいという動機から留学を計画する。

イタリアを選んだ理由は当時のイタリア映画。ロッセリーニやヴィスコンティ、フェリーニといった監督たちに衝撃を受けたからだという。学生時代から彼女の行動力は眼を見張る。イタリア映画監督に関する100ページ程の英語の論文を作成して、イタリア国立映画実験センターに送り入学許可を得たのだ。

吉崎氏のこのエピソードは、自分がやりたいことが明確になったら、実現に向けての具体的なアクションを起こすことが重要であると教えてくれる。丁度、その頃の吉崎氏の年齢に近い今回参加している学生たちに、一歩踏み出す勇気を後押し出来る実例として伝わってくればと考えた。

2.2 イタリア留学時代

イタリア留学時代の話は私の様な映画人にとってはとても羨ましく、興味深い逸話である。イタリア映画最盛期の監督陣が留学先の学校では教壇に立っていたという。パゾリーニ、ヴィスコンティ、ロッセリーニ、フォルコ・クイリチなどの錚々たる映画監督の教えを受けたという。

当時、イタリア国立映画実験センターで学ぶ日本人女性は彼女だけだったという。パイオニアとしての苦勞も感じ取れる。最初に直面したのは語学力の問題。しかし、それよりも深刻だったのは社会的な事情で学校が閉鎖となり就学困難に陥ったことだ。この状況を恩師であるパゾリーニから別の映画学校を紹介してもらい事なきを得る。

このエピソードは困難にあつたとしても乗り越えていく突破力を感じさせるエピソードである。今の学生から見ると学校が閉鎖されることは現実的ではないかも知れないが、困難に立ち向かうバイタリティを感じてもらえれば良いのではないだろうか。

2.3 映画の買付の仕事

留学から帰国後、テレビのADなどの仕事を経て日本ヘラルド映画に入社する。その時にイタリア映画に詳しいことを評価され、今度

は映画買付の仕事を買ってイタリアに赴く。時代はビデオの草創期で、二次利用のビデオ市場が拡大。映画コンテンツの市場が劇場公開だけではなくビデオ市場向けの作品買付が新たに広がってきた頃である。今はハリウッド映画が映画産業の中心に位置しているが、当時はイタリアを初めとしてヨーロッパ映画の市場価値が高かった。時代の流れの中で彼女が活躍出来る映画買付という仕事を得ることになる。

今でもホラー映画の金字塔となっている『ゾンビ』や名作と語り継がれている『ニュー・シネマ・パラダイス』なども彼女がディールをおこなった作品。表舞台では伝えられていない裏方としての映画買付という仕事の一端が感じられるエピソードである。本講義で映画買付の仕事の初めて知るだろう学生にもわかりやすく伝えられればと考えた。

2.4 巨匠フェリーニとの交流

吉崎氏はフェリーニの『甘い生活』が素晴らしくて30回ほどは観ているという。撮影現場に会いに行くところから交流が始まり、サーカスと一緒に行く逸話は当時のフェリーニの人となりを知ることが出来るエピソードだ。遠い異国の巨匠の懐に入り込みプライベートも含めて交流をしていた日本人女性が他にいたであろうか。

彼女の処世術を知る上でこのエピソードは興味深い。この話から学生が学んで欲しいことは、行動力が挙げられる。臆することなく突き進む彼女の行動する力が数々の実績を生んでいるのだ。聴講する学生への刺激になればと考えて、敢えてフェリーニとの逸話をピックアップして彼女に投げかけた。講義では詳しく説明することはなかったが、自伝本の中のこのエピソードは当時の空気が伝わってくる記憶に残るエピソードだ。



図2: フェデリコ・フェリーニ監督と吉崎道代氏

2.5 映画の買付の限界

映画買付をおこなっていた吉崎氏が映画製作プロデューサーとなる転機についての話である。当時、彼女が買付したかった作品、ケビン・コスナー監督の『ダンス・ウィズ・ウルブズ』とベルナルド・ベルトルッチ監督の『ラストエンペラー』が本社の意向により買付が実現しなかった。最終決定は当時勤めていた日本ヘラルド映画の首脳陣の判断によって決まる。ヒットすると確信した作品でも自分一人では決めることが出来なかった。

そのもどかしい思いが自分だけで決済出来る自分の会社を設立することを決断させる。吉崎氏は本講義の中でも転機となったこのエピソードは特に話をしたいことのひとつとしていた。それだけ彼女の人生にとっての大きな転機になったということだ。人生の大きなターニングポイントである。

長い人生の中では生き方を変える大きな転換点があることを教えてくれる。

2.6 NDF インターナショナル設立。アカデミー賞受賞作品製作

当時、企業メセナが盛んで、文化貢献に企業が積極的な社会情勢もあり、立ち上げた製作会社NDF インターナショナルには出資が集まった。設立から程なくして『クライング・ゲーム』(ニール・ジョーダン監督)、『ハワーズ・エンド』(ジェイムズ・アイボリー監督)をプロデュースすることになる。2作品とも世界的に大ヒットして米アカデミー賞で計15部門にノミネートされ、『クライング・ゲーム』は脚本賞、『ハワーズ・エンド』は主演女優賞、脚色賞、美術賞を受賞することになる。

映画プロデューサーとして米アカデミー賞ノミネート、受賞作品に携わった吉崎氏が日本ではほとんど知られていない理由としては、活躍の場を日本ではなく世界市場と位置付けているからだ。彼女はロンドンを拠点として映画プロデュースをおこなっている。

製作する映画にほとんど日本からの出資はなく、出資者はイギリスを中心とした海外の投資家で構成されている。そして、完成した作品はイギリス映画という位置付けとなる。

もう一つの理由は、日本におけるセルフパブリシティを一切おこなってこなかったからだとも言える。だからこそ、今回の特別講義は貴重な機会だったと言える。

2.7 映画プロデュースの考え方

吉崎氏の映画をプロデュースする際の考え方を伺いたいと思い、本の中の彼女の考え方がわかるポイントを抽出して質問した。

そのポイントとは、下記の4点。

- (1) 英語の映画であること
- (2) ゲリラ手法
- (3) 有名な監督を使う
- (4) 社会性のあるテーマをエッジに描く

自伝本の中にも数々の映画をプロデュースする際に何度も出てくる。映画製作の重要なポイントと言える。英語の映画ということは世界市場に向けて作品を作るということで、ゲリラ手法は製作コストを下げる施策である。有名な監督の起用はビジネス的にも品質保証を意味する。社会性のあるテーマをエッジに描くというのは、時代性を捉えて注目を集める内容を先鋭的に描くという考え方だ。香港が中国に返還されるタイミングで公開を想定して製作していた『チャイニーズ・ボックス』(ウェイン・ワン監督)などは上手くはいかなかったが、彼女なりの映画ビジネスの法則を考えての展開だった。数々の映画を生み出す上でのフィロソフィーとも言うべきエッセンスである。

トライアル&エラーを繰り返していくうちに自分なりの方法論を編み出していくことが出来る。

この方法論は映画製作を目指している若者たちにも参考になるのではないだろうか。

3. 講義についての総括

3.1 吉崎氏の女性に対する熱いメッセージ

本講義のセッティングに際しては海外からゲストを招聘する時と同じ考え方で進めた。例えば来日予定日から充分に余裕を持って開催日程の調整をおこなった。しかし、様々なトラブルが発生して来日は講義の前日となり、登壇する吉崎氏は体調を崩して、車椅子での登壇となった。後日談ではあるが講義の時は背骨の圧迫骨折を起こしていて、とても講義が出来る様な体調ではなかったと聞く。しかし、激痛に耐えて微塵も体調不良の様子を見せずに90分の有意義な講義をやり通した。意志の強さとやり通すことの信念を感じた。

今回はコロナの感染が若干落ち着いていた時期に開催出来たことにより、会場参加とオンライン参加のハイブリット形式での講義となった。会場の参加者の中に多くの女性がいるのを見て吉崎氏は応援の言葉を伝えた。自分が子育てをしながらプライベートを犠牲にすることなく仕事をおこなって来た自負があるのだろう。“恋をしなくて

はいけません。恋は糧になるから” “私生活を犠牲にすることはない” “女性は映画界に向いている。がんばれ” という温かくも心強いメッセージで締め括った。

3.2 あとがき

余談になるが、私が吉崎氏に最初にお会いしたのは今から約12年前になる。妻が日本ヘラルド映画国際部で働いていたことがあり、吉崎氏は、当時NDFインターナショナルを立ち上げて数々の作品を製作し、そのほとんどの作品を日本ヘラルド映画が日本での権利を買付して配給していた。そのつながりから家族旅行でイギリスに赴いた際にご自宅を訪問。高級住宅街の一角の日本庭園のある家でディナーをご馳走になった。その時の縁で吉崎氏から指名で帰国時の自伝本の宣伝協力の依頼が来た。私は現在、映画業界の次世代育成に尽力しており、吉崎氏の講義は学生たちへの強烈な刺激となると考えて依頼を受け、今回の講義の企画をすることになった。

世界の映画界で仕事をしたいという想いから日本を飛び出してイタリアに留学する。彼女が学生の時代は1ドル=360円の時代で、今以上に海外へ行くこと自体が高いハードルであった時代である。イタリアで学び、映画の買付をおこなって、活躍の場をロンドンに移して映画プロデューサーとして知名度を上げた。未婚の母として異国の地で子育てをしながら数々の作品をプロデュースしていくバイタリティは今も全く衰えていない。

自叙伝にも何度か登場する息子アド氏も今では母の後継者として映画のプロデュースの他、テレビドラマのショーランナーとしても新作を生み出している。

吉崎氏の生きざまはまさしく自伝本のタイトルの通り「嵐を呼ぶ女」の人生である。今回の吉崎氏の講義から刺激を受けて世界に飛び出して活躍出来る次世代の映画人が育ってくれることを願っている。

(注1)

吉崎道代氏プロフィール

大分県出身。高校卒業後、イタリア・ローマに留学し映画学校で学ぶ。1975年、日本ヘラルド映画社に入社。ディストリビューターとして欧州映画日本配給権の買付に携わる。『ニュー・シネマ・パラダイス』（1988年、ジュゼッペ・トルナトーレ監督）の日本配給権取得により日本でベストディストリビューター賞を受賞。配給買付業の傍ら、大島渚監督の『戦場のメリークリスマス』（1983年）の全契約を取りまとめる。1992年、映画製作会社NDFジャパンを設立。

製作投資や共同製作をした代表作として『裸のランチ』（1991年、デヴィッド・クローネンバーグ監督、Genie最優秀映画賞他）、『ハワーズ・エンド』（1992年、ジェームズ・アイヴォリー監督、アカデミー賞9部門ノミネート、主演女優・脚色・美術賞受賞）、『クライング・ゲーム』（1992年、ニール・ジョーダン監督、アカデミー賞6部門ノミネート、脚本賞受賞）、『スモーク』（1995年、ウェイン・ワン監督、ベルリン国際映画祭銀熊賞受賞）などがある。1995年 NDFインターナショナルを英国で設立。

『カーマ・スートラ／愛の教科書』（1996年、ミラー・ナール監督）、『バスキア』（1996年、ジュリアン・シュナーベル監督）、『チャイニーズ・ボックス』（1997年、ウェイン・ワン監督）、『オスカー・ワイルド』（1997年、ブライアン・ギルバート監督）、『タイタス』（1999年、ジュリー・テイモア監督）などの世界的なヒット作を製作。

参考文献

[1] 『嵐を呼ぶ女 アカデミー賞を獲った日本人女性映画プロデューサー、愛と闘いの記録』

本に関する参考情報

<https://www.kinejunshop.com/items/63253594>

著者：吉崎道代

編集：山田克己(igi)

プロデューサー：坂上直行

発行：キネマ旬報社

発売日：2022年7月

定価：2,750円(税込)

言語：日本語

<書籍内容>

序章 クリント・イーストウッド 私のアパートにやって来た変な男

1章 オスカー受賞式出席そしてオスカー授賞式の舞台裏で展開する、女優たちの熾烈な闘い

2章 オスカー負の遺産

3章 フラッシュバック

4章 ディストリビューターとして買い付けた映画と、思い出深い映画

5章 ヘラルド・ボニー会社設立

6章 NDFジャパン製作会社設立(1992年)

7章 映画製作会社NDFインターナショナル設立(1995年)

8章 プロデューサーとは、そしてその役目

9章 企画中の映画作品

10章 幻の傑作映画製作記

11章 コロナパンデミック時代の映画製作(英国のケース)

12章 ムービー(映画)の未来像

